

演劇的アプローチを取り入れた日本語学習者と日本語話者の合同授業の試み

橋本慎吾

本研究者は、演劇的アプローチを日本語教育に取り入れ、音声表現教育、特にパラ言語教育への応用を試みている。2008年度から、日本語学習者と日本人学生との合同参加による口頭表現演習の授業を担当することになった。本発表ではこの授業における実践について報告する。

この授業は、日本人学生にとっては、外国人とのコミュニケーションを体験しながら、自身の口頭表現を意識化することが目標であり、日本語学習者にとっては、日本語話者の発話をモデルとしながら、自身の口頭表現を調整することが目標である。教師は、日本語話者と学習者の双方に学ぶ意義のある授業をデザインすることを自身の目標とした。

この授業では、①インプロやゲームによるウォームアップ ②アドリブ・ロールプレイ ③ダイアログ作成による会話の精緻化 ④シーン単位の練習における実験と調整、の4段階を踏んで、日本語によるコミュニケーションを円滑に進める方法を各自が模索する。この流れには、平田オリザ氏の方法論を中心とした演劇的アプローチを取り入れている。

第1回目の授業は日本人学生のみに対し、授業の方針と演劇的アプローチの考え方を概説し、日本語教科書の会話の分析を行なった。まず会話を読み、そのあと実際に喋るように立ち位置や場面を考えてもらってその会話を読んでもらった。身体を使って読んでみることにより、その会話の不自然さが実感できる。この活動の後、その会話を、自身が自然だと感じる会話に書き直してもらった。この活動により、日本人学生側の日本語表現に対する意識化が促進され、以降の授業への取り組み方を考えるきっかけとなった。

2回目の授業から学習者との合同授業を開始。「依頼」「誘い」を上記の段階を踏んで学習していく。本発表では、この授業における学習者の口頭表現の変化を示しながら、演劇的アプローチによる口頭表現学習の効果について検討する。